

田向遺跡発掘調査説明資料

財団法人山形県埋蔵文化財センター 2010年9月26日

調査要項

遺跡名	田向遺跡(たむかいいせき)
所在地	山形県村山市大字名取字田向
遺跡番号	平成11年度新規登録
調査委託者	国土交通省山形河川国道事務所
調査原因	東北中央道(東根～尾花沢)
現地調査	平成22年5月17日～平成22年8月24日
調査面積	4,000平方メートル
遺跡種別	集落跡
時代	平安時代
遺構	溝・土坑・柱穴等
遺物	近現代陶磁器・石製品・土師器・須恵器
調査担当者	調査課長 阿部明彦 課長補佐 伊藤邦弘 専門調査研究員 氏家信行 主任調査研究員 高橋 敏(調査主任) 調査員 佐藤智幸
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所・村山市教育委員会・山形県教育庁村山教育事務所



作業風景 (東から)

1 調査の概要

田向遺跡は、山形盆地北端に位置し、最上川の三難所といわれる「基点」・「隼」・「三ヶ瀬」の右岸の多くの遺跡が点在する河島山丘陵南麓から広がる低地部に立地しています。遺跡のほぼ中央には、丘陵の裾を縫うように蟬田川が南西に流下しています。地目は水田が主となりますが、転作が行われ桃・サクランボなどの果樹やスイカ・蕎麦の畑と水田が混在しています。

今回の調査は東北中央自動車道(東根～尾花沢)建設工事に伴い実施しました。調査範囲は、県教育庁文化財保護振興課による詳細分布調査の結果を受けて、遺構・遺物が確認された4,000㎡について、調査対象となりました。

2 見つかった遺構と遺跡

田向遺跡の調査区は、南側のA区と北側のB区に分けられます。A区は戦時中の食糧増産政策による開墾と、昭和40年代のほ場整備事業や個人の田面改変などにより大きく削平されていることが判明しました。深く掘り込まれた遺構や西側の一部には、かろうじて削平を免れた遺構が確認されました。

A区からは、溝跡、柱穴、土坑などが検出されました。

溝跡は調査区の西側に多く分布しています。中には、ガラスや肥料袋などが出土して、つい最近まで水路として使用されていたような溝跡もありますが、他は遺物の出土がなく、時期を判断することは現時点では難しそうです。

柱穴は、その断面観察から柱の痕跡が確認できるものもありますが、対応する柱穴がなく建物跡として構成することは、現時点ではできませんでした。

B区では、溝跡、柱穴、土坑などが検出されました。また、ガラス片やビニール・塩ビパイプが見つかった現代の攪乱土坑もありました。

溝跡は1条、調査区の南西隅で確認されました。しかし削平を受けたためか、浅い溝跡となっていました。遺物の出土がなかったため、時期の判断はできませんでした。

柱穴は、対応する柱穴がなく建物跡として構成することはできませんでした。

調査区東側から、主軸方向を揃えて4基の長方形の土坑が検出されました。埋土から、それぞれの土坑は一度に埋められた様子がうかがえ、墓坑ではないかとの指摘もあります。土壌サンプルを採取し、詳細な分析を依頼する予定です。

出土した遺物は、A区・B区それぞれ極めて少数にとどまりました。遺物の大半は近現代の陶磁器片でしたが、少ないながらも、平安時代の所産と考えられるロクロ土師器や須恵器の破片が出土しています。

3 まとめ

今回の調査では、田向遺跡からは平安時代の集落跡をうかがわせるような痕跡は、あまり確認することはできませんでした。開墾事業や土地改良などこの地域の人々の農業に対する熱心な取り組みにより、やむを得ず削平された可能性があります。しかしながら、隣接する松橋遺跡・清水遺跡などでは平安時代の住居跡や溝跡など多くの遺構が確認されています。この北村山地方では奈良・平安時代の遺跡の調査例は多くなく、今回の調査で得られた資料は、この地域の平安時代後半を考えるうえで、とても貴重なものとなります。



作業風景 (南西から)



ラジコンヘリによる空中写真 (北東上空から)



SP147

SD149・SD187

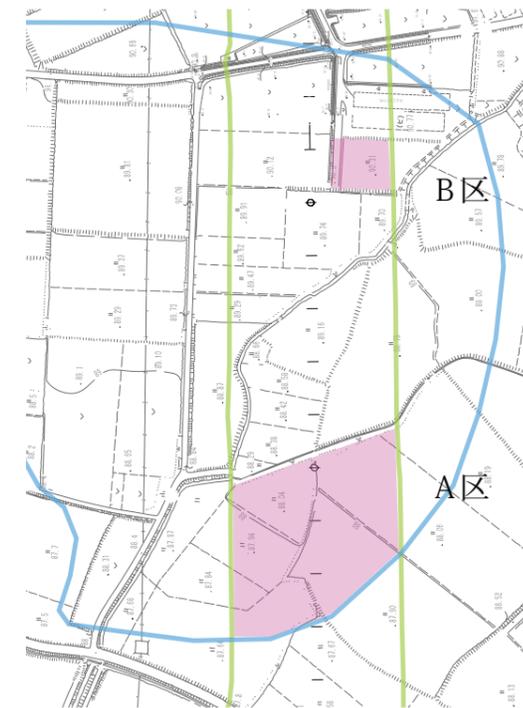


A区遺構配置図

A区・B区の遺構配置図の縮尺は任意であり、不同です。



SK1065



田向遺跡調査概要図



B区遺構配置図



SK1058



SD172